

2025年1月19日 第二礼拝

説教題「ともし火は燭台の上に」 マタイ福音書5章15～16節

主任牧師 加藤 誠

「ともし火をともして升の下に置く人はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである」(マタイ5:15)

二十歳の感謝礼拝に参加してくれた若者たちの心に、普段は礼拝に来ていなくても、あけぼの幼稚園や教会学校がしっかりとあることを感じてうれしくなりました。幼稚園や教会学校の時期に一人ひとりと真摯に向かい合い、聖書のみ言葉を分かち合われた方々の祈りと愛が確かに届いていることを思い、感謝を新たにしました。

さて、先週の礼拝では主イエスが「あなたがたは世の光／地の塩である」（マタイ5・13～14）と語りかけたのは、さまざまな病気を抱えて、その日を生きるのに精いっぱいの人たちであったことを聴きました。その人たちを主イエスは、「塩」のように、あなたがたは「なくてはならない貴重な存在」だ、「世の中の歪みを正す働きをする存在」だ、そして山の上の家々の「光」のように、あなたがたは「夜の暗さの中を旅する人の目印となり元気を与える存在」だと語られたのです。主イエスは「可哀そうに」という上から視線ではなく、神さまからいただく命を精一杯に生きる一人ひとりと同じ地平に立ち、心から慈しみ愛されました。だからこそ主イエスに出会った人たちは、主イエスを「人間を照らす光、恵みと真理に満ちた光、暗闇に打ち勝つ光」（ヨハネ一章）と証したのです。

それらの言葉に続く15節16節を先ほどご一緒に読みました。「ともし火を燭台の上に置くように、あなたのともし火を人々の間に輝かせ…人々があなたがたの立派な行いを見て…」とはどういう意味なのでしょう。

「ともし火を升の下に置く人はいない」とあるように、ともし火は部屋の中を照らすためのものです。若い人たちには「ともし火」と言われてもピンと来ないかもしれませんが、30年前の阪神淡路大震災では電気もガスも水道もすべてがストップし、教会に避難してきた近所の方たちと寒く暗い夜を共に過ごしました。教会中の布団や座布団を集めてきて敷物にし、クリスマスで使ったローソクを空き缶に差し込んで灯りもしました。余震で倒れないように注意しながら、それでも部屋全体が少しでも明るく照らされる場所にローソクを置きました。どんな小さな明かりでも、暗い闇を照らす光があるとホッとするものです。そしてどんなに小さな明かりにもぬくもりがあり、心があたためられるのです。

この「あなたのともし火を人々の間に輝かせ…」というときの「ともし火」とは何のことだろう。直後に「あなたがたの立派な行いを見て」とありますから、「ともし火」とは「わたしの立派な行い」（口語訳では「良い行い」）＝「ともし火」であると理解すべきなのかもしれません。しかし、わたしの行いは果たして人々を照らすだけの光となりえているのか…と考えたときに、「ともし火」とはまず第一にイエス・キリストであると知らされます。「光」としてわたしの暗くゆがんだ心を照らし、恵みと真理に導くのはキリスト以外にないからです。そうであるなら「あなたのともし火を人々の間に輝かせ…」とは、「まことの光なるキリスト」を升の下に隠してしまうようなことなく人々の前で証していくことであり、さらにはキリストに照らされた心をもって「あなたの隣人と出会っていきなさい」という励ましの意味ではないか。それゆえ「立派な行い」とは「主イエスの愛と恵みに心を照らされて人々の間で生きていくこと」ではないかと示されるのです。

これも阪神淡路大震災の時のことですが、震度七の地震を体験することに始まり、神戸の街中が非常事態宣言の状態となり、教会が避難所になって多くの人たちと共同生活が始まるなど、すべてが初めての体験で、すべてが試行錯誤でした。「震災が起これば教会はどうすべきか」など神学校では教わってないわけです。神戸には全国の教会からボランティアの方たちが次々に来てくれて、さまざまな支援活動を一緒にしましたが、毎晩その日のそれぞれの体験を聴き合っては聖書を開き語り合いました。「こういう時どうすべきか」のマニュアルはありませんでしたが、聖書が「指針」となり、インマヌエルの主、十字架の主が私たちの試行錯誤を導く「道しるべ」となり、行く道を照らす「ともし火」となってくださいました。「主イエスならどう考えられるだろうか。主イエスなら何を選び取られるだろうか」。「まことの光なる主イエス」を思う時に私たちの心が照らされ、「この道しるべ」を大切にしていこう…という思いが深く強められたいたのでした。

そして今回、震災から 30 年目を迎える神戸に足を運んでみて示されたことは、「まことの光なる主イエス」が私たちを招いている方向。それは「新生」「新しく生まれる」歩みだということです。未曾有の悲しみの出来事としての大震災。できればこのような震災の悲しみを経験しないほうがよいのですが、しかし私たち人間は「あたたかく、優しい日々」だけでは大切なことに気づけない側面を持っている。「厳しく、辛い出来事」を通してこそ、揺さぶられハッと気づかされ、ほんとうに大切にすべきものに目覚めさせられていく。主イエスを十字架にかけてはいけなかったし、あのような苦しみを味わせないほうがずっと良かったけれども、主イエスが十字架にかかってくれたからこそ、はっきり示された神の真実の愛があり、弟子たちの「新生」という出来

事が起こったのでした。まったく新しい人として根底から新たに創り変えられていく。それは十字架の悲劇を通してこそ起こされた。そして主イエスは今日も私たちを神の前に、人々の前に「新たに生まれ、創造された人」として歩むようにと祈り招いておられるのです。この方の光に照らされて新たにされていきましょう。